

NHK広島局
原爆プロジェクトチーム

日本放送

ヒロシマ
残留

放射能の

四十二年

原爆救援隊の軌跡





ヒロシマ

残留

放射能

四十二年

NHK広島局・
原爆プロジェクトチーム

原爆救援隊の軌跡

ヒロシマ・残留放射能の四十二年——原爆救援隊の軌跡——

●発行日——昭和六三年七月三〇日 第一刷発行

●定価——一、五〇〇円

●著者——NHK広島局・原爆プロジェクト・チーム

丸山隆司

加藤寛夫＋渡辺忠章

鎌田七男

©1988 NHK Project Team Printed in Japan

●発行所——日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町四一一 郵便番号一五〇

振替・東京一―四九七〇― 電話(〇三)四六四―七三二―

●装幀——杉浦康平＋谷村彰彦

●印刷所——太平印刷社＋大熊整美堂

●製本所——豊文社

検印省略 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-14-008605-X C1036 ¥1500E



〔原爆救援隊の軌跡〕

はじめに

毎年八月になると、NHK広島放送局では原爆関連番組が二〇本以上も制作される。その中心はNHK特集であり、このテーマを何にするか、それが私達の最大の関心事となる。

作業は前年の秋に始まる。昭和六一年の秋も私達は次のNHK特集のテーマを何にするか話しあっていた。原爆といっても四〇年以上も前のことであり、単なる秘話発掘だけではしょうがない。今日性が最も重要である。しかも、昭和五九年放送の「核戦争後の地球」以来、科学的側面も重要になっている。広島局でも、昭和六〇年、昭和六一年と「爆心地・生と死の記録」や「よみがえる被爆データ」など、科学の眼で原爆に迫るNHK特集を制作してきた。それでは来年どうするかなどと話しあったのである。その頃、ヨーロッパのみならず日本でも、チェルノブイリ放射能汚染の問題が世間をにぎわしていた。いわゆる残留放射能の問題である。これを何とかヒロシマと結びつけられないか、どうしたら結びつけられるか、討論を重ねた。

広島には「入市被爆者」がたくさんいるのに、これまで番組では正面から一度もふれられていない。入市被爆者だったら、残留放射能と結びつくのではないかという意見が出された。それはいいかもしれない。是非やろうと、みんなの気持が盛り上がった。

被爆者健康手帳が交付される人々の中に、直接被爆したわけではないが、爆心地から二キロメートル以内に、二週間以内に入市した人達がいる。こうした人達が入市被爆者である。彼らは残留放射能を浴

びているからこそ手帳が交付されたのである。

この人達が四〇年以上たった今、どうなっているのか。それを調査することが、チェルノブイリ放射能汚染の四〇年後を考えることにならないか——そう私達は考えたのである。

昭和六〇年の被爆四〇周年を機に、広島市周辺の市町村でも被爆体験手記集が続々と発行されていた。その中の一つに『賀茂台地の声』という手記集があった。スタッフの一人がそれを読んでみると、中に東広島市にあった賀茂郡北部防衛隊、通称「賀北部隊」の隊員達の手記がのっていた。それによれば、原爆が投下された翌日、およそ二〇〇名以上の隊員達が広島に救援にかけつけ、一週間ほど、遺体処理にあたったとある。典型的な入市被爆者であり、しかも当時の年齢が二〇歳前後。現在は六〇歳あまりである。東広島といえば今でこそ多少都市化しているが、まだ農村のおもかげを残すところである。人の移動も少なく調査がしやすい上、集団で行動しているため、お互いのチェックがしやすい。

こうして私達は賀北部隊の隊員達のその後を手がかりにして、広島原爆の残留放射能の調査を行なうことに決めた。が、はたして四〇年以上も前の残留放射能が隊員達にどのような影響を与えているものだろうか。放射線影響研究所や広島大学の原爆放射能医学研究所にあたってみた。今まで調査らしい調査はしたことがないという。しかし、「NHKがきちんとした聞きとり調査さえしてくれば、疫学調査や染色体調査はできるし、その調査は意味があることです。協力しますから、是非おやりなさい。」とすすめてくれた。

その後、放射線医学総合研究所や気象研究所の研究者達の協力も得られ、六二年三月、番組ロケがようやくスタートし、その年の八月三日、NHK特集「救援・ヒロシマ残留放射能の四二年」として放送された。

この番組は救援にあたった隊員達が当時のような体験をし、またその後どのような人生をおくってきたか、克明に取材すると共に科学者達の調査を通じて、今までほとんど知られていなかった残留放射能の影響を明らかにしたものである。

今日も広島原爆資料館には、世界各国の人々が訪れ、平和公園では修学旅行の中学生達が語り部の話を聞いている。チェルノブイリの原発事故以来、核と放射能に対する関心は以前にも増して強まってきているように思える。その意味で、広島は昔話ではないし、私達はこれからも広島からのメッセージを送りたいと思っている。

この本はそんな私達の思いを綴ったものであり、残留放射能というきわめて今日的課題に真正面からとりくんだという自負心もある。私達は、この本から、広島を通じてみた現代の核状況を是非読みとっていただければと願っている。

昭和六三年七月一日

NHK広島局・原爆プロジェクト・チーム 添田雅孝

目次

はじめに

1 四二年後の原爆 11

(1) 発端 11

(2) チェルノブイリの救援隊 17

2 閃光の中のブラックホール 24

(1) 運命の扉 24

(2) 原爆放射線 30

(3) 現代への通底器 37

3 埋もれた原爆救援部隊 39

(1) 語り始めた入市被爆者 39

(2) 証言集『賀茂台地の声』 41

(3) 広島の入市被爆 45

(4) 中国第三二〇五〇部隊 50

4 残留放射能を追え 58

(1) 集まった第一線の研究者 58

(2) 残留放射能とは何か 63

(3) 新しい試み 69

5 賀北部隊の発掘 76

(1) 地を這うように 76

(2) 分かつてきた部隊構成 84

(3) 村の集会所で 91

6 夏の日の幻影 100

(1) 一〇〇万都市のビルの下に

(2) 人は、こうして灰になった 105 100

(3) 祈り 113

7 被曝線量の割り出し 118

(1) 誘導放射能の計算 118

(2) 血液をください 127

8 死者達の群像 134

	9		10		11		12
(1) 一枚の写真	134						
(2) 最も早い死	139						
(3) 癌死、そして……	143						
科学の挑戦	149						
(1) フォールアウトをつかめ	149						
(2) 再現実験―内部被曝の追及	157						
四二年目の再会	164						
(1) 記念碑を建てよう	164						
(2) 放射線の深く暗い淵	168						
(3) 黙禱―実現した隊員総会	172						
被曝判定会議	178						
(1) 持ち寄られた調査結果	178						
(2) 議論百出―残された問題	187						
終章―救援記念碑の祈り	191						
(1) 刻まれた九文字	191						
(2) ヒロシマとチェルノブイリの意味	196						

(3) 広がる放射能汚染の中で 202

付章 213

賀北部隊工月中隊の被曝線量の物理的計算〈丸山隆司〉 214

賀北部隊工月中隊の疫学的調査〈加藤寛夫、渡辺忠章〉 224

賀北部隊工月中隊における残留放射能被曝線量の推定〈鎌田七男〉 233

— 染色体異常率を基にして —

あとがき 239

1 四二年後の原爆

(1) 発 端

ある原爆手帳申請

昭和六二年六月。広島県東広島市、東広島保健所。その初老の男は、耳許から後頭部に残った白髪をさかんに掻き上げ、自分の吃音に苛立ちながら、まくしたて

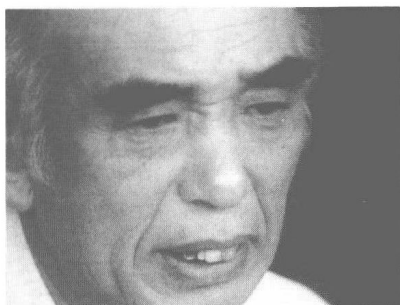
ていた。

「それでね、何ですわ、こう、死体を運搬する者は、する者。焼く者は焼く者で、その、作業の分担が分かれとったわけですわ。はい、私は、一日中、一体一体、担架で。ときどき、こうやって、『助けてくれ!!』言うて、こう手を出すんをね、その手に触ったら、皮がむけるわけですよ。こう、ズルツと。」

廊下から静かにVTRカメラが入ってくる。カメラマンは体を低く構えて、男の背後から正面へと回り込んだ。

男は、カメラに一瞥もくれず、しゃべり続けた。

「いや、たくさんおられましたですよ。私らが出会ったのは、大本営跡の学徒、女子挺身隊いうんか、それが建物の下敷きになったのを全部出して並べてあったんです。夏にね、死んで二日もたつと顔色が変わるわけです。傷ついたり膨れたりで、緑色になってるんです。それへね、お母さんが泣いておられるんです、座ってね。『あなた分かりますか、何で娘さんと分かるんか』言うて聞いたらね、『着ている



42年後、爆心地の惨状を語る木原さん

モンペで分かる』言うんです。その、我が子だということがね、着物でもう、そんなんですよ、もう……。」

男の目に涙が浮かんだ。

「で、市内で出会われた方で、御記憶になっておられる方はいらつしやいませんか。」

男の興奮を断ち切って、係官の事務的な質問が飛んだ。

六〇歳になった木原昭憲さんは、この日、二〇年ぶりに三回目の原爆手帳交付申請を行なった。

昭和二〇年、当時木原さんは一八歳、広島から山陽本線に沿って東へ約四〇キロメートルの、賀茂郡高屋町（現、東広島市）に住んでいた。隣町にある県立西条農学校の生徒だった木原さんは、八月六日のその日、西条町内の西条農業会に勤労動員されて作業にあたっていた。午前一一時頃、大型爆弾で広島が大変だという噂が流れてきた。三八式歩兵銃を渡され、午後一時から西条駅の警備についた。したがって、木原さんは直接原爆に出遭ったわけではない。爆風で傷ついたわけでもなければ、もちろん、やけどの痕もない。しかし、彼は被爆者なのである。

昭和二〇年八月六日、午後七時。家に帰った木原さんに、召集令状が届いていた。

「あの、わら半紙半分位の大きさで、一枚だけです。粗末な紙切れに『防衛召集』ってね、確かそう書いてあったと……。」

全ては、この一枚の召集令状から始まった。木原さんは、六日夜緊急編成された陸軍部隊の一員とし

て、翌七日に広島市中心部に入った。爆心地近くで、負傷者の救護、おびただし数の死体の処理にあたる。一三日帰還。それは、まさに生き地獄の中の一週間であった。子供の頃お寺で見せられた地獄絵、鬼に舌を抜かれ、剣の山を全身切り刻まれながら登り、ノコギリで股から脳天まで挽かれ、釜で煮られ、泣き喚きながら焼かれる。極限の痛苦を描いた、あの地獄絵もはるかに凌ぐ、凄まじい光景だったと木原さんはいう。えも言われぬ臭気、人が腐る臭いが体じゅうにまとわりつく。ジュウジュウという人肉の焼ける音を、今でもはつきり思い出すことができるという。

「何人ぐらいで行かれましたか、全部で。」

「二四〇―一五〇人ぐらいじゃなかったですかね。」

「その中でですね、名前を憶えておられる方を、今おっしゃっていただけませんか。」

昭和四〇年、木原さんは、憶えていた「岡田八郎」と「憲兵軍曹、田中」を二人の証人として原爆手帳交付を申請し、内容不十分で却下された。翌四一年、再度申請したが同様に却下。そして二〇年たった今、彼は、この係官の質問に、何人でも証人を挙げることができる。原爆手帳は交付されるだろう。すなわち、木原さんは四二年目にしてようやく、法律的にも「被爆者」であることが認められる。

だが、しかし、爆風も熱線も受けていない、八月六日に広島市内に居なかった木原さんが、なぜ「被爆者」なのか。そしてさらに、あの日からすでに四二年、なぜ今頃になって自ら被爆者であることを証明しなければならぬのか。

その答えは、原爆の本質そのものの中にある。

もう一つの原因被災

「入市被爆者のこと、新聞やテレビはほとんどりあげないんですね。まあ地味ではあるんだけど。体の不調を訴える人、かなりいるんですよ。」



高橋さん
を説明する被爆者入市
(土田ヒロミ氏撮影)

広島平和文化センターの高橋昭博事業部長が呟いた。

「ニュウシヒバク？」

耳慣れない言葉に一瞬虚を衝かれて、私は聞き返した。

「原爆直後に家族を捜して市内に入った人達ですよ。当時、毒を吸ったからだとか、残っていたガスのためだとか、それに黒い雨、例のね。直接原爆に遭うとらん人でも体がおかしくなりましたね。死んだ人もずいぶんいるという話ですよ。」

原爆、あるいは被爆者という言葉で、まずイメージするのは大量殺戮、ケロイド、白血病、ガンなどであろう。そして、これらの悲劇のほとんどが、数千度の熱線を浴び、秒速一〇〇メートルを越える爆風に吹き飛ばされ、叩きつけられ、ガラス片を身に打ち込まれ、崩れた建物に押しつぶされ、続いて起こった火災の炎に焼かれた直接被爆者について語られてきた。高橋さん自身も、一四歳のとき広島市内で被爆、右手の四本の指と手首、そして右肘がケロイドのために屈伸できなくなった。手術で少しは良くなったが、今でも人と話すときは無意識のうちに右手を隠す。被爆者援護や原水爆禁止の運動に関わり、広島平和記念資料館の館長を勤め、被爆者の実情、その心の屈折、そして反核平和の想いを語り続けてきた。その高橋さんが「目を向けよ」という入市被爆者とは何なのか。

広島の場合、行政的には、被爆者とは次の三つのいずれかに該当する人で被爆者健康手帳を所持している人という、とされている。

①原子爆弾が投下された際、当時の広島市内（および指定された周辺町村）において直接被爆した人とその当時その人の胎児であった人。